

No.2

# 芥川だより

発行日/2006年8月20日

発行人 梵 ぼん

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

## 「ほめ言葉」

あなたは、どんな言葉をかけられたらうれしいですか。

きれいだね。やさしいね。かしこいね。

5月の初め、昔の山友達が亀屋に集まった。信州、堺などから六人。いつものことながら、酒の飲み方がすごい。一升飲めるからと言っても、何の自慢にもならない事を承知で、盃を重ねていく。神戸から来たY先輩が、私に向かって、今度の山岳会80年史を、おまえの文が救ったわ。おまえの文は、金が取れる。

私は、これまで書いた文も少ないし、まして褒めてもらったこともない。しかし、この言葉で、もしかしたら、書けるかなと、心を動かされた。Y先輩は、出版会社を経営する編集長。フリーの編集者であるM君はまあ、そうですかねと、同意しかねる様子。

私の心は、Y先輩の言葉に惹きつけられ、「芥川だより」につながった。

## 芥川商店街歳時記

今月の予定

8/25(金)  
午後6時～

子どもまつり

芥川小学校で映画会、盆踊りがあります。皆さんお誘いのうえ参加ください。映画は、6時から、ピカチュウたんけんたいとバズライトイヤーです。

盆踊りは、7時からグランドで。主催は芥川地区福祉委員会、芥川連合自治会

9/30(土)  
午後1時開場

ワンマンライブ

小濱達郎さんがワンマンライブを高槻市生涯学習センター2階多目的ホールで行います。

午後1時30分開演です、前売りチケットは、1500円。当日は、2000円。全席自由席。

## ■ 投稿記事大募集 ■

「芥川だより」に

あなたの「日々思うこと」や「身近に起こった出来事」など投稿してみませんか？

当方にて編集し記事にさせていただきます。

お題目は自由ですのでお気軽に投稿してください。

投稿を希望される方は、原稿用紙かメールでお送り下さい。

なお投稿いただきました原稿は返却いたしませんのでご了承ください。

# 芥川の写真屋さん

年齢不問の童心を応援します。

# Food Pantry

私は、大正15年生まれ。村の中心にある信用組合に勤めていた。仕事は、今で言う簿記、そろばんを使い帳簿に数字を記入していた。

少し計算にも慣れ、自分ながらに落ち着きが見えてきて、仕事にも慣れてきた頃。何回か、そろばんの手を止めて、村の区長宅へ走る、モンペ姿で血液型A、名前を胸に縫い付けて、空襲警報と書いた紙を、村の区長さんに渡して、仕事場に帰ったらB29は、大空に白線を残したまま、見えなくなっていた。

そして、昭和20年8月15日の終戦。縁あって見合いをし、結婚して高槻に住むようになった。しかし、食べるもの、着るものすべてが、田舎と都会の混合になって、私を、街の生活に馴染ませるには、相当時間が必要だった。

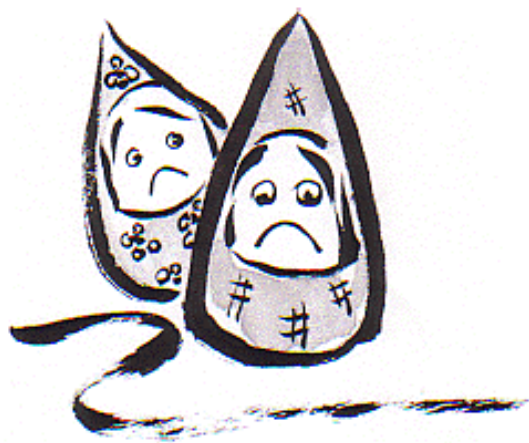
新婚旅行はなかつたけれど、ふたりで、どこかへ行きたい。しかし、現在でも叶わぬ夢。

姑が気を使って、映画でも見にいったよ、と言う。許しがあって初めて、夜、近所の映画館へ、照れ屋の主人は、手をつなぐという気持ちもなかった。唄にあるように、色気なしの男は、甲斐性なし。と言うが、その通り。

病気知らずの良人が、突然入院の宣告を受ける。手術するでもなし、8ヶ月間の病院生活、長男が幼稚園だった。

祖父母のオモリやと思えば、腹を立てることもなかった。病院へ1週間に一度見舞いに行くことも、姑の指示通り、私は、ロボットかもしれない。でも、バスの中、病院への道が、私の気持ちを独りにし、心が和むひとときだった。暗い夜道も、怖くなかった。しかし、時間をかけて、病院へ行く中ですよ、と言う。心にぽっかり穴があいたような気持ちで、良人は何を考えているやろ、と怒りで高鳴る気持ちを抑えて家路につく。子供は、おじいさんの膝で寝ている。姑が、御飯がフゴに入っているよ。その一言で、鬼の目にも涙か。

(注)フゴ：昔は、御飯をオヒツにいれ、オヒツをワラで編んだフゴに入れて使用していた



「婚期は時代と共に変わって来た」

縁側に腰かけてと書けば、優雅な生活と思われるかもしれない。今、自分の置かれている立場を考えているのだ。いろんなことを振り返り心の整理をすることも、決して悪いことではない。汗をかきながら夫婦で働いている姿、よくやれるな。「オイ」、「ハイ」で、意気投合している。

前号で愛した人はいないと書いたが、片思い、いや双方とも結婚しよう、出来ると考えていた、生木をさくとはいえない、いえば、やはり、本当の愛に体当たりする勇気が無かったのかも知れない。目に前の田んぼで夫婦相和して、精出している姿を見たとき、自分の存在が大変情けない姿、悲惨な姿の負け犬だった。ずっしりと重い腰を上げざるを得なかった、全く愛する相手に未練があったのでもないが。言い訳だろうか、結婚したということが、今でもピンと来ないし、生活は安定、不安、まだ、まだ。お互いに補足しなければ生きて行かれそうにない。婚期を失うなよ。「先行きもつとピンと来る人が、必ず現れると思うよ」。「贅沢だ、世間知らずだ、こんな良い縁談はない」。

人にすすめる世話もしてきた自分が、今更こんな殊勝なことを言っているのか。自分自身の人生に対する後悔なのかもと慰めている。男は仕事、女は家庭。文部省の教育課程だとか、むずかしい事と言った時代は、遠くなつて行く。いろんなことが、まだまだ根強くへばりついていると思うのは、自分の年代だけか。若い人よ、しっかりしておくれ。

# うなぎ

夏は、毎日川へ遊びに行った。由良川は、ダムが出来るまではほんとうにきれいな川であった。何の為に毎日行くかと言えば、うなぎを取るのが楽しかったからだ。うなぎ獲りの方法は、水中にもぐり、岩のウロに隠れているうなぎを引っ掛け針で獲る。うなぎは、なかなか見つけられないし、獲れない。(ウロとは、隠れやすい岩の隙間や洞穴のことである。)うなぎは、かならずウロの中から頭だけを出し、上流からの餌を狙って口をゆっくり動かししている。その動きによって、うなぎの白い部分が見える。

うなぎは、毎日上流に向かって、ウロを探して夜移動する。うなぎがウロにする場所や岩は、だいたい決まっている。そのウロを、ひとつひとつ見ていく。私の川での活動範囲は、2キロぐらいだから、夕方までかかる。獲れない日の方が多いが、それでも次の日も行く。一日で2匹獲ったこともある。中学1年の夏、数人で猿の顔に似た大きな岩のウロに隠れていた。最初は、暗くて見えなかったが、何かいるような気配がするの、何度か水中に潜り、息を殺してよく見ると、真つ暗なウロの中に、すうーと猿の顔が浮かび上がりすぐに消えてしまふ。

これまで見たこともない、化け物と誰かが言う。独りだったら、恐くて帰るところだが、友達がいることもあって、獲ろうと皆が言い、作戦開始。うなぎは、引っ掛け針を近づけると引っ込む習性があるから、後ろから細い竹で突いて、ビツクリして出てきた時に、引っ掛ける。その一瞬が勝負。ところが、その化け物の



隠れている岩は、突く穴がない。仕方がないから、岩の周りの堀りやすい所を、幾度も潜って、慎重に石や砂を取り除いて、ウロの暗闇を目を凝らして見ると、うっすらと白い腹が見える。これは大きなうなぎだ。

しかし、問題がある。いつも使っている、タコ糸の先に針を付け、笹竿の先にさした用具では逃げられる可能性が高い。その上、引っ掛けても、ウロの出口が小さいために、引っ張り出せないかもしれない。皆で相談して、二人同時に潜り、引っ掛けることにした。あとひとり後は後ろから突く。見つけてから、数時間後。われわれは、その化け物を河原の小石の上にほりあげた。

その化け物は、長さが1メートルを優に越え、胴回りも腕ぐらいであった。きつと川の主だと、皆で言い合った。そのうなぎは、しきたり通り、最初に見つけた子が持つて帰った。その時の友達は、ひとり左官、ひとりは大工、もう一人は測量屋になった。

十数年後、最初に見つけた子は、いろいろと悩みをかかえることになる。川の主であるかもしれない、あの化け物の所為でなければいいのだけれども。ちなみに、私は、右の耳が聞こえにくくなった。

## 梵のぼやき

デフレの次はインフレか。我が家の借銭なら仕方なく払う算段を考えるが、国の借金なんか知らんわ。しかし、確実に国の借金は増え続けている。会社ならばとつくに倒産しているレベルを超えていると聞けば、子や孫あるいはその先のひ孫達に、大変なつけを残すことになる。政治家が悪いの、官僚がどうのと言っても、払うのは国民である。消費税を10パーセントぐらい上げたぐらいでは追いつかない。ここは一番インフレだ、金の価値を百分の一ぐらいいれば、借金も百分の一になる。すごいインフレが必ず来る、これは妄想かな？

僧の話しを聞きながら、何か発見でもしたように、確かにありそうな事だ。

しかし、私の半信半疑の気持ちは変わらない。

失礼ですが、コレクションされている小袖は、いくらぐらいするんですか。ものによっては

億ぐらいます。ほう、それはすごい。と答えながら、ホントだろうか。

私の心を見透かすように、奈良の僧を舐めたらあかんぞ。と言う。心の底に、お寺に対し畏敬の気持ちが薄らいでいたのは確かだが。ギラギラとした目つき、生気溢れんばかりの僧。来店してから15分ぐらい。ふつうなら、

また来ます、と言って帰る人が多いが、帰る気配がない。外出していた家内が帰って来た。私は、話題をかえて、酒を飲んだり、遊んだりされませんが、と聞いた。すると、意外な返事が返ってきた。遊ぶのは、祇園のお茶屋のIでしか遊ばない。えらい高い所ですね、月にどのぐらい行かれます。2回ぐらい行く。ほう、それは、それはタイシタもんだ。それで思い出した。

だいぶ前になるが、学生時代に、一時下宿したことがあった。4畳半一間、月の家賃3500円。部屋の間仕切りは、ベニヤ板や障子といった具合の貧乏下宿である。その時の下宿仲間T君がいた。彼と偶然、京都のホテルで会った。彼は、実家の神社を兄に代わって継ぐ為に、京都のR大学を卒業後、神官になる為に東京のK大学に行った。その後、出雲大社にいと便りで知っていた。

その夜、T君が、私をホテルの部屋に招き入れて、語り出した。俺は今、東京の神社本庁に勤めている。京都へは度々来る。何の為に、と問うと。実は大きな声では言えないけど、

次号につづく

貧乏のススメ 自伝記その2

木馬と書いて、キンマと読む。今から40年ぐらい前まであり。山村で山から、木材などの運搬に使われた、木製のソリのことである。丹波の山奥では、現金収入を得るために、農閑期に炭焼きをした。私が小学生のころ、よく炭俵を背中に背負い、急なキンマ道の栈橋を怖々下った。今は林道が出来たが、その当時は、山の道と言っても、獣道を踏みならした程度のもので歩き難く。山間の木材の搬出には、必ずキンマ道を整備して使った。谷間に作るため、なだらかな地面のところは少なく、ガケや急な箇所が多い。そんなところは、小木を組み合わせて橋をかける。谷の底から数メートルの高さになる箇所もある。

キンマ自体の大きさは、幅が50センチ、長さ2メートルぐらい。その上に、長さが6メートルもあるような太い木を背丈ぐらいまで積む。前に突き出た木に、ワイヤーを巻きつけて、器用にキンマ道を下る。キンマの滑りをよくするため、オイルを枕木に塗る。

雨の日に、山から荷を背負いキンマの栈橋を下るのは、ほんとうに怖い。枕木は、30センチぐらいの間隔で敷かれている。手すりも何もない、滑れば落ちる。あまり高い栈橋は回り道もした。しかし、一度も落ちてけがをしたと言う話は聞かない。

長雨で大変困りましたが、もうそろそろ暑い日  
が来るでしょう。たくさん雨をもらいましたので、  
水の心配はなくなりました。今日は芥川だよりを  
送って頂き、早速読ませてもらいました、なか  
か、皆さん名文で一気に読み終わり、次号を楽し  
みにしております。

Sさん 78歳

■編集後記■

皆様のご支援のおかげで、第2号を発行すること  
が出来ました。創刊号の反響は、予想以上であり  
ました。いろいろな人から、おもしろいから続け  
るように言われました。ペンの力は偉大なり。挿  
絵の協力者も決まりました。次号からは新たな書  
き手が増えます。期待してください。

